

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの		特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
ビタミン成分	塩酸チアミン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミン散1%「ホエイ」	ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトララーゼの補酵素として五炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与					頻度不明(過敏症)						ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。			通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1～10mgを1日1～3回経口投与する。 塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1～10g、1日1～3回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1～1g、1日1～3回経口投与 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療 2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給 (消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体力労働時等) 3. ウェルニッケ脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合 神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害 〔5. の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。〕	

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		用法用量	効能効果
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール 上昇抑制作用 家兎に酪酸リ ポフラビンを 投与すると、 ラノリン-綿 実油投与による 血清コレステ ロール値の上 昇を抑制した。					0.1~5%未満 (下痢、悪 心・嘔吐、胃 膨満、腹部膨 満)、0.1%未 満(胃不快感、 食欲不振)						尿を黄変させ る(臨床検査 値に影響)			高コレステ ロール血症 及びビタミン B2の欠乏又は 代謝障害が 関与すると推 定される場合 の適応に 対して、効果 がないのに 月余にわたっ て漫然と使用 しないこと。		酪酸リポフラビンとして、通 常、成人1日5~20mgを2 ~3回に分経口投与する。 高コレステロール血症に は、通常、成人1日60~ 120mgを2~3回に分経 口投与する。	高コレステ ロール血症 ・ビタミンB2欠 乏症の予防及 び治療。 ・下記疾患のう ち、ビタミンB2 の欠乏又は代 謝障害が関与 すると推定され る場合。 口角炎、口唇 炎、舌炎、脂 漏性湿疹、結 膜炎、びまん性 表層角膜炎 ・ビタミンB2の 需要が増大 し、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 妊産婦、授乳 婦、はげしい肉 体労働時等)。 高コレステ ロール血症及び ビタミンB2の欠 乏又は代謝障 害が関与すると 推定される 場合の適応に 対して、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用しない こと。

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の詳備	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用 (併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ))		重篤な副作用のおそれ (薬理・毒性に特異体質・アレルギー等によるもの)		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ (薬理・毒性に特異体質・アレルギー等によるもの)		薬理に基づく習慣性	過敏禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの					過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
ビタミンB6 (塩酸ピリドキシン)	アデロキシン錠	体内でリン酸ピリドキサールとなり、細胞・ミトコンドリア内におけるB6酵素群の補酵素として生体のたんぱく質・アミノ酸代謝の中心的役割を果たす。γ-アミノ酪酸の生成や各種のアミン類(アドレナリン、ノルアドレナリン、5-ヒドロキシトリプタミン等)の生成に不可欠である。脂質代謝との関係も認められている。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意 レボドパ(レボドパの作用を減弱)	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	過敏禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果		
											高齢者、妊婦、産婦、授乳婦等、新生児、乳幼児、小児等				長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	ビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される疾患(口角炎、口唇炎、舌炎、急性・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害)では、効果が無いの月余にわたって湿熱と使用すべきでない。	長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	塩酸ピリドキシンとして、通常成人1日10~100mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。きわめてまれであるが、依存症の場合には、より大量を用いる必要がある場合は観察を十分に行いながら投与すること。特に新生児、乳幼児への投与は少量から徐々に増量し、症状に適合した投与量に到達させること。高齢者では減量。		ビタミンB6欠乏症の予防及び治療(薬物投与によるものを除く。例えばイソニアジド、サイクロセリン、パニシラミン)	ビタミンB6の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦など) ビタミンB6依存症(ビタミンB6反応性貧血、ビタミンB6依存性痙攣、アミノ酸代謝異常など) 下記疾患のうちビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合 口角炎、口唇炎、舌炎、急性・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害(宿酔)

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 認めるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量以上 適量使用・誤使 用のおそれ			長期使用に よる健康被害 のおそれ
ビタミンB12 (メコバラミン)	メコバール錠250μg メコバール錠500μg	メコバラミンは、生体内補酵素型ビタミンB12の1種であり、ホモシステインからメチオニン合成するメチオニン合成酵素の補酵素として働き、メチル基転位反応に重要な役割を担っている。神経細胞内小器官へよく移行し、核酸・蛋白質合成を促進する作用、軸索内輸送、軸索再生の促進する作用、髄鞘形成(リン脂質合成)の促進する作用、シナプス伝達の遅延、神経伝達物質の減少を回復する作用を有する。					0.1~5%未満(食欲不振、悪心・嘔吐、下痢)	0.1%未満(過敏症)			水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者(長期大量)					水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたる大量投与は避けることが望ましい。本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。	錠250μg	末梢性神経障害
																通常、成人は1日6錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。	錠500μg	通常、成人は1日3錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたって大量に投与することは避けることが望ましい。

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)		併用注意		重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 り過ぎ使用・誤使 用のおそれ			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
ビタミンC	アスコルビン酸「ヨシダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。						頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等)					高齢者			下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1. ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊娠婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など)。 2. 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。
ビタミンE	ユベラ錠	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。 環安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。 抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。 内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)							末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきではない。		錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止	

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上	過量使用、誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
その他	アミノエチルスルホン酸	タウリン散「大正」					0.5%未満 (嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振)	0.5%未満 (過敏症)									高年齢者	高年齢者	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うっ血性心不全
	グルクロノラクトン	グロンサン散	循環血流量増加														高年齢者	1回0.3~1g、1日3回、適宜増減。高年齢者では用量に注意	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善、尋麻疹、湿疹、中毒疹、妊娠悪阻、妊娠中毒

避妊薬

製品群No. 50

ワークシートNo.30

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果・症状の悪化 につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ			重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点		併用禁忌・他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるも の	適量使用・誤使用のおそ れ	長期使用に よる健康損 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
メンフェゴール	腔内で溶けて、腔壁や子宮頸部に密着して殺精子作用を発揮する						発疹、発赤、かゆみ			医学上の理由(病 気等)で絶対に妊 娠を避けなければ ならない人 男性か女性(ある いは両方)が薬や 洗剤などにより、ア レルギー症状(発 疹、かゆみ等)を起 こしたことがある人 性器にびらん、炎 症等を起している 人					腔内のみ使用し、内服 しないこと	必要時に1回1錠を腔内深 く挿入すること	殺精子作用に よる避妊

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理に基づく習慣性	過敏反応	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量に関するもの			
トリコマイシン	なし																	
クロラムフェニコール	クロマイ錠	グラム陽性、陰性菌に抗菌作用					頻度不明(長期運用:内服・注射等全身投与と同様な症状)	頻度不明(過敏症)		本剤成分過敏症 既往歴	高齢者				必要最小限の使用。内服させない。	長期運用しないこと。	1日1回1錠、局所に挿入	クロラムフェニコール感性菌による細菌性肺炎
エチニルエストラジオール	外用なし、プロセキソール錠	前立腺、精のう重量を減少させ血中テストステロン値を低下させる		血糖降下薬(血糖降下作用の減少)、リトナビル(本剤の作用減少)	頻度不明(心不全、狭心症、長期運用:血栓症)	頻度不明(黄疽、肝機能異常、血圧上昇、精神障害の再発、大血管梗塞投与により高カルシウム血症・ナトリウムや体液貯留、不正出血、経血量変化、下腹部痛、乳房緊満感、乳房痛、悪心、おう吐、食欲不振、下痢、腹痛、胃痛、頭痛、めまい、倦怠感、陰萎)	頻度不明(過敏症)		エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い(腫瘍の悪化あるいは顕性化)、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴(血液凝固能の亢進によりこれらの増悪)	肝障害、子宮筋腫、子宮内頸症または既往歴、心疾患・腎疾患または既往歴、てんかん、糖尿病、高齢者、					長期運用:血栓症、卵巣ホルモン剤を長期(1年以上)使用した閉経期以降の婦人では子宮内頸症を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間、使用量と危険度の上昇に相関性があることを示唆する疫学調査あり	1回0.5~1mg、1日3回。適宜増減。高齢者減量	前立腺癌、閉経後の末期乳癌(男性ホルモン療法に抵抗を示す場合)	

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬理に基づく 習慣性	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	適応禁忌	慎重投与		症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化						
エストラジ オール	貼付剤あり、エストラ ダームM	卵巣機能低下または消失 によるエスト ロゲン欠乏症 による閉経症 状の改善。	併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	リファンピシン・抗てんかん 薬・HIV逆転写酵素阻害薬・ セイヨウオトギリソウ含有食 品・ステロイドホルモン(本剤 の代謝が促進され血中濃度 が低下)、プロテアーゼ阻害 薬(本剤の血中濃度が変化)	頻度不明(静 脈血栓塞栓 症、血性静 脈炎)、乳癌・ 冠動脈性心 疾患、脳卒 中・痴呆など の発生との 関連性を示 唆する報告 あり。	頻度不明(ア ナフィキ シン様症状)	頻度不明(片 頭痛、静脈 瘤の悪化、胆石 症、胆のう疾 患、胆汁うっ 滞、黄疸、下肢 痛、ボルフィ リン症の悪 化、耳硬化 症)、5%以上 (一次刺激性 の接触性皮 膚炎、不正出 血、消退出 血、帯下、乳 房緊満感)、 0.1~5%未 満(かぶれ、 水疱、色素沈 着、外陰部腫 脹感、外陰部 掻痒感、子宮 内腔増殖、乳 房痛、乳頭 痛、乳腺症、 頭痛、眠気、 めまい、動 悸、おう吐、 吐気、下痢、 腰部膨満感、 便秘、心窩部 痛、浮腫、肝 機能障害、腹 痛、下腹部 痛、関節痛、 腰痛、耳鳴、 体重増加・減 少、倦怠感、 トリグリセリ ド上昇、フィ ブリンノーゲン 増加)、0.1% 未満(不眠、 胸部不快感、 血圧上昇、発 熱)	頻度不明(過 敏症)	エストロゲン依存 性腫瘍およびその 疑い(腫瘍の悪化 あるいは顕性化)、 血性静脈炎・肺 塞栓症または既往 歴(血液凝固能の 亢進によりこれら の増悪)、本剤成 分過敏症既往歴、 妊婦または妊娠の 可能性および授乳 婦、動脈性の血栓 塞栓症	子宮筋腫、子宮内 膜症、乳癌家族病 因が強いまたは乳 房結節、乳腺症、 乳房レントゲンに異 常、高血圧・心疾 患・腎疾患または 既往歴、糖尿病、 片頭痛、てんかん、 肝障害、術前また は長期臥床状態、 全身性エリテマト ーデス、高齢者	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
																1回1枚(0.72mg)貼付。2日 ごとはりかえ	更年期障害お よび卵巣欠落 症状に伴う：血 管運動神経症 状、泌尿生殖器 の萎縮症、閉経後骨 粗鬆症			

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果					
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ			薬理に基づく 過剰反応	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェン ヒドラミン	ペナ錠	抗ヒスタミン 作用: H1受容体 に対しヒスタミン と競合的に拮 抗すること により作用を あらわす。 ヒスタミン遊 離抑制作用	併用薬品(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	アルコ ール・中 枢神経抑 制剤・MAO 阻害剤(中 枢神経抑 制作用が増 強)、抗コ リン作用 を有する 薬剤(抗コ リン作用 が増強)	重篤な副作用のおそれ	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	頻度不明(口 渴、悪心・嘔 吐、下痢、め まい、倦怠 感、神経過 敏、頭痛、眠 気、動悸) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作	頻度不明(過 敏症)	緑内障(悪化)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(悪化)	授乳中の婦人、未 熟児、新生児、妊 婦又は妊娠してい る可能性のある婦 人、高齢者	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	塩酸ジフェンヒドラミンとし て、通常成人1回30~ 50mg(3~5錠)を1日2~3 回経口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。	尋麻疹、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹、皮膚 炎)、枯草熱、 アレルギー性 鼻炎、血管運 動性鼻炎、急 性鼻炎、春季 カタルに伴う そう痒
	d-マレイン酸 クロルフェニ ラミン	ボララミン錠 2mg	抗ヒスタミン 作用			中枢神経抑制剤・アルコ ール・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキドバ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(顔 赤、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、振 戦、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心悸亢 進、頸脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ Al-Pの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、疲 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、眠気を 催すことが あるので自動 車の運転等 危険を伴う機 械の操作	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)	本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 緑内障(緑内障の 増悪)、前立腺肥 大等下部尿路に 閉塞性疾患(症状 の増悪)、低出生 体重児・新生児(痙 攣等の重篤な反応 があらわれるお それ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 心性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人							d-マレイン酸クロルフェニ ラミンとして、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。	じん麻疹、血 管運動性浮 腫、皮膚疾患 に伴うそう 痒(湿疹・皮 膚炎、皮膚 そう痒症、蕁 麻疹)、アレル ギー性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴う しゃみ・鼻汁・ 咳嗽。

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	機能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康損 害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	メキタジン	ゼスラン錠	ケミカルメディ エーター拮抗 作用、抗ヒス タミン作用、 抗アレルギー 作用		中枢神経抑制剤・アルコー ル(眠気)、抗うつ剤・MAO阻 害剤・アトロピン様作用を有 する薬剤(口渇、排尿困難)、 トモキサレン(光線過敏症)	肝機能障害・ 黄疸・血小板 減少(頻度不 明)	ショック、アナ フィラキシー 様症状(頻度 不明)	0.1~5%未 満(眠気、け い息感、ふら ふら感、口 渇、胃部不快 感)、0.1%未 満(AST (GOT)、ALT (GPT)の上 昇、血小板減 少、頭痛、め まい、下痢、 便秘、食欲不 振、嘔吐、胃 痛、腹痛、胸 部苦悶感、心 悸亢進、排尿 困難、咽頭 痛、浮腫、顔 面潮紅、視調 筋障害、月経 異常、味覚異 常、口内しび れ感)、頻度 不明(黄疸)、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作。	0.1%未満(過 敏症)		本剤の成分、フェ ノチアジン系化合 物及びその類似化 合物に対し過敏症 の既往歴、線内障 (線内障を悪化)、 前立腺肥大等下 部尿路に閉塞性 疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、授乳婦、低出 生体重児、新生 児、乳児、幼児又 は小児			過量投与で眠 気、悪心、嘔吐、 軽度の抗コリン 作用性障害	他のフェノチ アジン系化合 物・長期投与 又は大量投 与により角 膜・水晶体の 混濁、網膜・ 角膜の色素 沈着		1.通常成人1回メキタジン として6mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジン として3mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘 息、2.アレル ギー性鼻炎、じん 麻疹、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹・皮膚 炎、皮膚そう痒 症)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量に上 限があるもの	過量使用、誤使 用のおそれ			長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
抗炎症成分	グリチルリチン酸モノアンモニウム	グリチロン注一	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、権紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等						長期適用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
ビタミン成分	ビタミンB1(塩酸チアミン)	塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」/塩酸チアミン散1%「ホエイ」	ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトララーゼの補酵素として王炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与					頻度不明(過敏症)										ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果が無いのに月余にわたって温然と使用すべきでない。		通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1～10mgを1日1～3回経口投与する。塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1～10g、1日1～3回経口投与。塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1～1g、1日1～3回経口投与。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療 2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊娠婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等) 3. ウエルニツケ脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合 神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害〔5. の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって温然と使用すべきでない。〕

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
			併用禁忌・他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康損 害のおそれ				
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 家兎に酪酸リポフラビンと投与すると、ラノリン-綿実油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。					0.1~5%未満(下痢、悪心・嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)					尿を黄変させる(臨床検査値に影響)			高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって温然と使用しないこと。		酪酸リポフラビンとして、通常、成人1日5~20mgを2~3回に分経口投与する。 高コレステロール血症には、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	・高コレステロール血症 ・ビタミンB2欠乏症の予防及び治療 ・下肥患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合、口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎 ・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時等)	

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)			F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	過敏薬	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				用法用量	効能効果
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの													
ビタミンB6 (塩酸ピリドキシン)	アデロキシン錠	体内でリン酸ピリドキサルとなり、細胞・ミトコンドリア内におけるB6酵素群の補酵素として生体のたん白質・アミノ酸代謝の中心的作用を果たす。γ-アミノ酪酸の生成や各種のアミン類(アドレナリン、ノルアドレナリン、5-ヒドロキシトリプタミン等)の生成に不可欠である。脂質代謝との関係も認められている。		レボドパ(レボドパの作用を減弱)			頻度不明(長期・大量投与・手足のしびれ、知覚異常等)	頻度不明(光線過敏症)					高齢者、妊婦、産婦、授乳婦等、新生児、乳幼児、小児等		長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	ビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される疾患(口角炎、口唇炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常		塩酸ピリドキシンとして、通常成人1日10~100mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。きわめてまれであるが、依存症の場合には、より大量を用いる必要がある場合もある。依存症に大量を用いる必要のある場合は観察を十分に行いながら投与すること。特に新生児、乳幼児への投与は少量から徐々に増量し、症状に適合した投与量に到達させること。高齢者では減量。	ビタミンB6欠乏症の予防及び治療(薬物投与によるものを除く)。例えばイソニアジド、サイクロセリン、ベニシラミン)ビタミンB6の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な状態に陥ると、ビタミンB6欠乏症、妊産婦、授乳婦など)ビタミンB6依存症(ビタミンB6反応性貧血、ビタミンB6依存性癲癇、アミノ酸代謝異常など)下記疾患のうちビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与する場合口角炎、口唇炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害(宿酔)		
ニコチン酸アミド	ニコチン酸アミド散ゾンネ	ニコチン酸アミドはニコチン酸とともにNAD、NADPに組み込まれ、脱水素酵素の補酵素として広く生体内の酸化還元反応にあずかる。											高齢者、妊婦、産婦、授乳婦、小児		2の適応(効能又は効果)に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。	1-2.ニコチン酸アミドとして通常成人1日25~200mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	口角炎、口内炎、舌炎、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、光線過敏性皮膚炎、メニエル症候群、末梢循環障害(レイノー病、四肢冷感、凍瘡、凍傷)、耳鳴、難聴				

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく留意性	適応禁忌 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上限があるもの 過量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
パントテン酸カルシウム	パシカル散 パントテン酸はCoAの構成成分であり、CoAは生体内でアセチル化をはじめ、ステロイド、脂肪酸、ポリフィリン等種々の生体必須物質の合成に関与するとともに、脂肪、蛋白質、炭水化物の代謝にも関与している。			0.1%未満(消化器)				大量投与により腹痛、下痢 2の適応(効能又は効果)に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		パントテン酸カルシウムとして1日10~200mg(0.1~2.0g)を1~3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1.パントテン酸欠乏症の予防および治療、パントテン酸の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦など)2.下肥疾患のうち、パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合。ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘。なお、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。
気管支拡張成分	dl-塩酸メチルエフェドリン散 dl-塩酸メチルエフェドリン散	アドレナリン作動性の気管支拡張作用と中枢性鎮咳作用を示す。	カテコールアミン製剤(不整脈、場合によっては心停止を起す) MAO阻害剤・甲状腺製剤(作用が増強)、キサンチン誘導体・ステロイド剤・利尿剤(血清カリウム値が低下)	β2刺激剤により重篤な血清カリウム値の低下 頻度不明(熱感)、0.1~5%未満(心悸亢進、顔面蒼白等、頭痛、不眠、めまい、眠気、神経過敏、疲労等、悪心、食欲不振、腹部膨満感等、口渇)	頻度不明(過敏症)、	カテコールアミン製剤を投与中(不整脈、場合によっては心停止を起すおそれ)	甲状腺機能亢進症、高血圧症、心疾患、糖尿病、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等、重症喘息(血清カリウム低下)	過度に使用を続けた場合、不整脈、場合によっては心停止を起すおそれがある		dl-塩酸メチルエフェドリンとして、通常成人1回25~50mgを1日3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。	下肥疾患に伴う咳嗽、気管支喘息、感冒、急性気管支炎、慢性気管支炎、肺結核、上気道炎(咽喉頭炎、鼻カタル)尋麻疹、湿疹

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	酒応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの
アミノ酸エチル スルホン酸 (タウリン) 成分	タウリン散 「大正」	・胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障 害に及ぼす 影響を有し、 ALT、γ-G ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエス テル比を改善 させた。また、 肝細胞の再 生を促進して 組織像を改 善させた。さ らに慢性障害 群においては 間質の結合 織増殖を抑制 した。胆汁 分泌などの肝 細胞機能維持 に働いた。 ・心筋代謝改 善作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下							高齢者								アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うつ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うつ血性心不全
整腸成分	乾燥酵母 「ホエイ」	乾燥酵母は含有する糖成分が総合して栄養補給、代謝機能促進、食欲増進、整腸などの薬効を現す。											大量で下痢				乾燥酵母として、通常成人1日5~10gを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンB群、たん白質の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給